

「その前夜」

渋谷隆作

堀 おい、安夫！ 安夫ったら、ちょっと待てよ。

松原安夫 なんだよ。

堀 あのさ、今日杉田んちに行くんだけど、たまには付き合えよ。

安夫 何言ってるんだよ。もう試験の日は近いんだぜ。遊んでらんないよ。

堀 なんだよ。最近付き合い悪いぞ。

安夫 仕方ねえだろ。受験生なんだから。

ナレーション 松原安夫は、青春高校 3 年生。安夫の頭の中は、今受験のことでいっぱいでした。学校から帰ってきて、すぐ予備校へ行き、家に帰ってくるのはいつも 10 時を過ぎるという毎日でした。そんなある日、予備校へ行った帰りの電車の中でのことでした。その日は、思ったより込んでいて、いつものように立ちながら参考書を開くのは難しいことでした。しかし、次の駅でうまい具合に前の席が空いた安夫は、素早く座り込み、ちょうど 2、3 ページ目を通したころ――。

効果音 (電車車内の音)

電車の婦人 あのう…。

安夫 はい。

婦人 すみませんけど、もうほんの少し、詰めていただけませんか？ (安夫、空ける) さ、坊や、お兄ちゃんが明けてくれましたよ。よかったわねえ。

安夫(モノローグ) あ～あ、これじゃやと座った意味がないじゃないか。隣の人の肩が当たって、うまく参考書が開けやしない。あ、いけない。なんて自分勝手なことを考えてんだろう。1 年前の僕なら、黙ってても代わってあげたのに。いつの間にか、こんな…。だけど、いくらクリスチャンだと言っても、受験生は受験生。とにかく、時間を惜しんで勉強しなければならないんだ。受験に成功することが、神様に喜ばれることになるんだから。

ナレーション そう、安夫は、高 1 の時にイエス様を信じクリスチャンだったのです。けれども、受験勉強が本格化したこの 1 年間、彼はいつしか、教会からも、聖書からも遠ざかっていたのです。次の日――。

堀 よう、島崎、どうだった、この前の公開模試？

島崎 ダメよ、全然。もう泣きたくなくなっちゃう。

堀 おい、杉田。お前、どうだったんだ？

杉田 ああ、バッチリよ。

島崎 杉田君、すごいわね。

杉田 これのお陰だよ。

ナレーション …と言いつつ、杉田君が差し出したのは、一冊の参考書でした。

安夫 ふーん、そんなもんかねえ。で、どこの使ってた？

堀 うん、なんでも、海川出版社の、「原宿予備校副読本」とか言ってた。

安夫 ふーん。

ナレーション 安夫は、ワラをもつかむ思いで、学校の帰りに、本屋に寄ってその本を探しました。

安夫(モノローグ) えーと、これでもない…と。おっ、あったあった！ これだな、杉田の言ってたやつ。

藤村英子 あら、安夫君？
安夫 あ、英子さん。
ナレーション それは、安夫の通っている教会の、高校生会のメンバー、藤村英子でした。その教会には3人の受験生がいて、英子も、安夫と共にそのうちの一人でした。
英子 久しぶりねえ。全然教会に来ないから、どうしてるのかと思ったわ。
安夫 ああ。まあ結構忙しくてねえ。これからまた予備校に行くんだよ。
英子 へえ、すごいんだなあ。ところで安夫君、その本、何？
安夫 あ、これ？ 参考書。今日、友達に聞いて買ったんだ。結構分かるみたいだぜ。
英子 ところでね。参考書のこともそうだけど、ほかの人にあんまり影響されないほうがいいんじゃないの？
安夫 なんのことだい？
英子 日曜日のことよ。安夫君、いつか、「ほかの人は日曜日だって勉強してるんだ。僕だってやらなくちゃ遅れちゃうよ」って言ってたわよねえ。確かにそうかもしれないけど、クリスチャンである安夫君が礼拝まで休んで勉強する必要があるのかしら。
安夫 でも、祈ってれば大学に入れるってわけでもないだろ？
英子 それはそうだけど、でも、大学に入ること自体、神様のご計画なのかどうか求めながら勉強しないと意味がないんじゃないの？
安夫 悪いけど、これから予備校行くんだ。じゃあね。
ナレーション さえぎるようにそう言うと、安夫は逃げるように外に出ました。心の中でひそかに気になっていたことを、英子にズバリと指摘されたことで、彼の心は少なからず動揺していたのです。その夜、安夫が予備校から帰ってきた時――。
効果音 (電話のベル。受話器を取る音)
安夫の母 はい、松原ですけど。あ、安夫ですか？ はい、ちょっとお待ちください。安夫さん、お電話ですよ。
ナレーション それは、教会の3人の受験生の一人、森咲子でした。
安夫 はい、もしもし。
森咲子 (フィルター音)あ、安夫君？ こんばんは。何してたの？
安夫 うん、少し勉強をね。
咲子 (フィルター音)そう、ラストスパートね。でも、あんまり根詰めないほうがいいんじゃない？
安夫 うん。でも受験まであとわずかだし。ところで、なんの用？
咲子 (フィルター音)ああ、あのね、今度、教会の学生部で集まってスケートに行くことになったの。どう、気分転換に？
安夫 誘ってくれるのはありがたいんだけど、やっぱりダメだな。
咲子 (フィルター音)そう、それは残念ね。ところで、今度の日曜日は来れる？
安夫 うーん、それもダメだな。
咲子 (フィルター音)そう…。英子さんも、牧師先生も、みんなで祈ってるのよ、あなたのこと。でも、安夫君は今、受験にすべてをかけてるのね。
安夫 まあね。咲子さんはすごく落ち着いてるように見えるけど、いい参考書とか、先生についての？
咲子 (フィルター音)ううん、そんなことないわよ。そうね、わたしが落ち着いて見るとすれば、そ

れはわたしもかけてるからなのよ。

安夫 え？ 君も受験に？

咲子 (フィルター音)ううん。

安夫 それじゃ何に？

咲子 (フィルター音)神様に。

安夫 神様に…。ふーん。でもどうして受験と信仰が関係あるんだい？

咲子 (フィルター音)うん、つまり、すべてを恵んでくださる神様は、すべてを最善にしてくださるって信じてるのよ。受験だって、その中の一つだと思うわ。

ナレーション 電話を切った後も、安夫の耳には、咲子の言葉が残っていました。

咲子 (フィルター音)わたしはね、かけてるのよ。

安夫 何に？

咲子 (フィルター音)神様に。

安夫(モノローグ) かけか…。でもなあ、分かるには分かるけど、ただ神を信じて何もしないっていうのもおかしいし、僕が今なくていけないのは、受験に成功することだ。それを神様も喜んでくれるんじゃないのかな。

ナレーション けれども、彼の必死の努力をよそに、学びはなかなか進みませんでした。あせればあせるほど、不安と恐れが募り、睡眠不足が募り、受験の 2、3 日前から、とうとう風邪を引いてしまったのです。そして、いよいよ明日は本番というその前夜――。

安夫(モノローグ) (セキ)えーと x^2+x+3 の解は、解の方程式がこうだから…と。(セキ)あー、ダメだ。あと 20 ページも残ってる。やっぱり参考書を変えないほうがよかったのかな。どうしたらいいんだ、おれ?!

ナレーション ズキズキ痛む頭を抱えながら寝転んだ安夫に、ふと、机の横に置いてある聖書が目に入りました。

安夫(モノローグ) そう言えば、森さんいつか、こんなこと言ってたなあ。

咲子 (エコー)わたしは、すべてを益に変えてくださる神様を信じてるの。わたしの好きな聖句は、ロマ書 8 章 28 節よ。

安夫(モノローグ) えっと、ここか。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

ナレーション 安夫は、更に読み進みました。

安夫(モノローグ) (聖書を読む)「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、(聖句朗読者の声に変わる)御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますよ。…私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。…しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、…そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。」

安夫(モノローグ) そうか。参考書じゃない。僕の間違ってたのは、これだったんだ。

ナレーション 安夫の言葉は、いつしか祈りに変わっていました。それは本当に長い間忘れかけていた祈りでした。

音楽

(エンディングBGM)

安夫

(祈り) 神様、僕は間違っていました。自分の力に頼って、あなたに信頼していませんでした。あなたを第一にしていませんでした。どうぞ赦してください。神様がこんなに僕のことを心にかけてくださっているのに、なぜ僕は自分のことを思い悩んでいたのでしょうか。手放しで、手放しですべてのことをイエス様のもとに持っていけばよかったのに。主よ、遅すぎたかもしれませんが、僕は今、神様に信頼します。すべてのことを働かせて益としてくださるあなたにお任せします。どうぞ、ただ神様のみ心が行われますように。

ナレーション

安夫の心には、この一年の間、絶えて味わったことのなかった、不思議な安らぎがよみがえっていました。いつしか深い眠りに就いた安夫をすっぽり包み込んで、間もなくその前夜は明けようとしていました――。

<完>